

出典：福沢諭吉『福沢諭吉教育論集』「徳育如何」／ オリジナル問題

文章略解……教育とは、喩えるならば草木にとつての肥料のようなものである。人間の智や徳の根本は、遺伝的な能力と生育の環境と社会趨勢によるものであり、教育はその発達を助けるにすぎない。人となりが社会的要因に規定されるという点では、社会は智や徳を教える大教場と言うこともできる。これに対して、学校における教育は、人心の一部分を左右するだけのわずかな機能しか持ち合わせていないということを知っておくべきであろう。

《解答例》

問1 人を育てる際に教育は肥料のように補助的な役割しか持たず、本人の資質や環境の方がより重要だということ。〔50字〕

問2 他勢力との武力紛争に従事していたこと。〔19字〕

問3 子どもは環境に応じて育つということ。〔18字〕

問4 智恵や人徳のような内面の価値でも、社会の影響を受けずに独自に生成されることはありえないということ。〔49字〕

《解説》

問5

人間の成長において、最も大きな役割を果たすのはその人の置かれた社会的な環境である。人間は、意図的に学校教育を施されなくても、生きるのに必要な知識や道徳を周囲から自然に身につけていく。また、その人元来の素質能力に成長が規定される部分も多い。これらに対して学校教育は、人間の成長を助ける肥料のような働きをするだけで、人格陶冶に与える影響はごくわずかである。したがって、学校教育を過大評価しない方がいい。(198字)

問1

比喩的な表現の説明にあたっては、「字面の意味」と「文脈の中での意味」との両方に共通する性質を抽出することを心がけるといい。ここでは、「かくの如し」とある「かく」の指示内容を押さえることがまず大切。これは、前段落で「草木は肥料によりて大いに長茂すといえども、ただその長茂を助くるのみにして……」(10行目)とされているところに相当している。

では、この「肥料」と「教育」とがいかなる意味・性質で共通するのか。これに関しては、傍線部分直後の「人の智徳は教育によりておおいに発達すといえども……」という記述と、前掲の「草木は肥料によりて……」の記述とを並べてみれば見えてくる。要するに①「成長・発達にあたって補助的な役割しか果たさない」ということだ。これに加えて、「その生々の根本を資るところは、空気と太陽の光熱と土壌津液とにあり」(10～11行目)・「その智徳の根本を資るところは、祖先遺伝の能力と、その生育の家風と、その社会の公義輿論とにあり」(15行目)という記述をくんで②「素質と環境が重要」というポイントも指摘してもらいたい。

問2

辞書的な意味がわからずとも、文脈と字面からある程度語義の推測は可能であろう。「干戈」の「干」は「たて」、「戈」は「ほこ」のこと。したがって熟語としての「干戈」は「戦い」「武器」を意味する。「戈」に「ほこ」の訓読みがあることがわからなくても、部首としての「戈」(ほこづくり)が「戦うこと」の意味である(戦・戒・戮・賊などの字を想起されたい)ことからある程度の推測はついたので、なからうか。

また、文脈からアプローチしても、傍線部分の直前が「戦国の世にはすべて武人多くして」となっていることから推測はつこう。

問3

これは単なる諺の知識問題。辞書的な意味を知らなくとも、直後の「けだし寺院のかたわらに遊戯する小童輩は、自然に仏法に慣れてその臭気を帯ぶるとの義ならん」という一文に注目できれば理解は容易であろう。この一文の内容から性質を抽出していけば解答になる。要は**問1**の解答と同じく「人間の成長にあたって環境の果たす役割が大きい」ということ。この点が踏まえられていけば解答としてはOK。

問4

傍線部分の文語的な表現を、平たく言い換えることがポイント。ここでは、「社会の圧制」という比喩的な表現も含まれているので、これをわかりやすく言い換える作業も必要になってくる。

この傍線部分の「無形の智徳」とは、直前の「有形の物」との対比で述べられている。「智徳」とは、解答例に記したように「智恵」と「人徳・道徳」のこと。これだけが「社会の圧制を免かるるの理」などあるはずがない……というのがこの傍線部分の主旨である。

ではその「社会の圧制」とは何か。これについては問題文中にこの「圧制」について言及された部分を探していけばいい。前文の「人はあたかも社会の奴隷にして、その圧制を蒙り」という記述から推せば、ここで言う「圧制」とは、「自由を制約される」＝「外からの条件で規制される」という意味合いであることがわかるだろう。

以上のことを考え合わせれば、解答の筋道は見えてくる。要は「智恵や道徳」という個人の内面に関するものでも、すべからず社会的に規定されているということだ。この点が踏まえられた解答ならばOKだ。「ひとり……理あるべからず」という記述に対応させて「……だが……なわけではない」（他のものと同様である）というニュアンスも織り込みたい。

問5

一橋大学などでよく出される要約問題。設問の中に内容的なポイントが含まれているので、注意して読んでいけば解答を導く際の着眼点がわかってくるだろう。字数制限（通常は二〇〇〜二五〇字）に応じて、解答の柱を定めた後に、問題文中の具体的な記述で「肉付け」をしていくようにすればいい。

ここでは、**問1**のところで検討したように、「教育」というものが人間の成長に与える役割を筆者（福沢）がかなり限定的に捉えていることがポイントとなる。第五段落（21行目以下）の記述では筆者は「学校の教育」・「学校に入れてこれを育すれば」などと、「教育」なる語を「学校」と関連づけて用いている。したがって「教育」＝「学校教育」と読んでいって差し支えない。ここを中軸にして、問題文全体の内容をカバーしていくことを心がけて解答を作っていけばいい。解答の柱は以下のようなことになろう。

① 学校教育の役割は肥料のように補助的なものである（↓問1）

② 人間の成長において重要な役割を果たすのは環境である（↓問3ほか）

③ 学校教育で人格を自由に形成できるというのは思いつきである（↓25～26行目・44～45行目）

これらを踏まえた上で、問題文の内容に即した「肉付け」がなされていけば解答としてはOKだろう。問題文中の難解な語（現在ではあまり用いられない漢語など）は、可能なかぎり平たい口語に置き換えていくようにすればいい。

出典：森鷗外『青年』／一橋大学・97年

文章略解……「純一」は「拊石」という人物がイブセンについて語るのを聴いていた。最初の諷刺的な語調の時は、何の気なしに聴いていたが、彼が突然真面目な口調になってイブセンの個人主義の両面性を指摘した時には、「純一」はそれまでの自分の考えが加速されるような感じがして勢いを得た。ところが「世間的自己」と「出世的自己」というまったく相異なる両面性の内容を説かれるにつけ、一朝一夕には整頓しがたい混乱を感じてしまった。

《解答》

問1

- A 蓄
B 生涯
C 発揮
D 莊重
E 維持

問2

自分が考え進めてきたことと同じ考えの演説者に加勢されること。〔30字・解答例〕

問3

- 1 習慣を脱して個人として生活させる思想。〔19字・解答例〕
社会を離れて個人の向上を常に目指す思想。〔20字・解答例〕
- 2 イブセンの個人主義には、個人の生活への志向と、向上への志向という、まったく相異なる両面があるから。〔49字・解答例〕

問2 比喩の説明の問題においては、「字面の意味」（辞書義）と「喩えている意味」（文脈義）の双方をカバーする記述（共通項もしくは中間項）を目指していくといい。

まずは辞書義の検討から。「棹さす」とは、流れに従って勢いよく動いていくことを意味する（漱石の『草枕』の中に「情に棹させば流される」という有名な一節があるので、知っている受験生も多いだろう）。これは続く「順流」（順調な流れ）という表現と呼応している。また、「同舟」とは、「異越同舟」の四字熟語にもあるように、「一緒に進んでいくこと」を意味する。

こうしたことを押さえた上で、傍線部分がある部分の文脈に照らして考えていく。ここで「純一」は、「拊石」がイブセンについて演説するのを聴き、「これまでタクワえて持っている思想の中心を動かされた」（19行目）ように感じている。だとすれば、この「棹さす」「順流」とは、「自分がそれまでに考えてきたことの流れ」という意味に解されよう（A）。こう解釈してくると、続く「同舟」に関しても、ここでの「演説者」＝「拊石」が、「純一」の考えに同調し、その勢いを加速させてくれる……という意味に取ることができよう（B）。

以上A・Bの要素が含まれている解答ならば基本的にOK。

問3 1については、「『世間的自己』『出世間的自己』の語を使わずに」という設問の指示だけを見ても大きな手がかりが得られよう。要はこの「世間的自己」と「出世間的自己」という二つの文言の意味するところを言い換えればいいわけだ。そのように心得てから問題文を見てみよう。

「両面性」についての「拊石」の科白を追っていくと「これがイブセンの自己の一面です……世間的自己です」（24～25行目）とある。この「これ」の指示内容が解答の一つめになる。問題文中の表現で言えば「あらゆる習慣の縛めを脱して、個人を個人として生活させようとする思想」（21行目）がこれに相当する。この内容を手短かに言い換えれば解答になる。もう一方の解答については、「イブセンにはべつに出世間的自己があって、始終向上して……高く高く飛ぼうとするのである」（27～30行目）の表現を押さえればよい。「世間」から出る「己の向上を目指す」旨の指摘があればいい。双方ともに「個人主義」についての説明なのだから、いずれの解答も「個人」から始めてまとめるとよい。

このように考えてくると、2の解答も見えてくる。1で指摘した二種類の「個人主義」が、あまりに相隔たっているものであるがゆえに、簡単には整頓できない……という事情を指摘することがここでのポイント。「整頓ができない」⇨「混乱が生じている」と考えてみれば、「純一」の心の中に生じた混乱の原因が、ここで示された「両面」の二つの内容のギャップにあることは推察できよう。

《例題4》

《解答》

L3F / 夏期 / *4

出典…白鳥庫吉『歴史と人傑』（明治二十三年二月「史学会雑誌」第三号所載）／京都大学 後期・01年

文章略解……東洋の歴史は、帝王傑物の事績を書き連ねた記録である。西洋においても、前近代まではこの種のものが多かった。帝王が国民を支配し、その自由意志が絶対的な法令となるような兵制的社会の時代では、歴史の編纂に携わる者が帝王傑物の業績のみに関心を寄せるのは無理からぬことである。が、西洋の人はいち早く、時代の推移は、社会の諸現象の因果が複雑に入りこんだ、必然的連関によることを考えた。傑物は、社会の変化していく方向を察知し、機に乗じてその傀儡になつたにすぎない。したがって、歴史家の主題は、社会運動の原動力のほうであつて、変化の原因や影響を司る法則を究明することが肝心である。

《解答例》

問1 (ア) この世の中でどう生きてらよいかを示してくれる指針、ということ。〔30字〕

(イ) 民衆の実情や要望が為政者に届くことを可能にする術もなく、ということ。〔33字〕

問2 ・人間の感情には元々傑物を尊重し崇拝する傾向があり、またその言行業績が、思想や処世術を説く格好の手本となるから。〔55字〕

・支配者たる帝王に政治上の絶対的権力が集中する社会では、彼の自由意志が社会を動かす最有力の力となるため。〔51字〕

問3 社会には、一筋の必然的な時代の流れというものがあり、その強大な勢いを押し止めることは不可能だ、ということ。〔53字〕

問4 時代がどう動こうとしているかを察知し、機に乗じてその傀儡となつたにすぎず、傑物を傑物たらしめた主体は、社会の側にある。

〔59字〕